

自閉症児における他者の視線に表れる意図の理解に関する研究

濱井 義郎

I. 問題と目的

自閉症に関する障害の中で最も特徴的で重大な問題は、対人相互関係の障害である。自閉症児は、表情や動作などの非言語コミュニケーションに欠け、友達を上手く作れない、楽しみや興味を持ったものを共有できない、相手の情緒的な感情を理解できないことなどから、社会生活を潤滑に過ごすことが難しくなっている。そこで、自閉症者が社会生活の中で他人との相互関係を上手に築けない原因は何かということ、認知的な側面から明確にする必要が求められている。

この自閉症児の課題を解明しようと試みた Baron-Cohen (1995) は三項表象の成立を基盤にして、他人の思考、気持、意図を読み取るシステムである心の理論の機構の発達が関係しているという理論を唱えた。さらに、相手の視線と意図と組み合わせて考える機能である注意共有機構の発達の障害こそが自閉症の中核的な障害であるとし、意図や視線の検出能力は問題ないものの、注意共有の仕組みの不全によって相手の視線からの情報を活用できなくなり、結果として相手の心を読むことができずに適切な人間関係を築けないといったことを関係づけて考えた。

一方で、自閉症児が視線などの人の発する社会的刺激に対して反応することが少ないことなどに注目した Moore(1999) は、自閉症児は定型発達児と異なった視線認知メカニズムを持ち、そのことによって他者の意図を理解するために必要である視線の読み取りの先にある経験と学習の機会を逃し、結果として獲得される欲求や願望などの他者の心の状態を理解することに阻害的な影響をもたらしているのではないかといった主張を行った。

Baron-Cohen, Campbell, Karmiloff-Smith, Grant and Walker (1995) は、自閉症児は相手の

視線定位は可能ではあるものの、意図や目的を推論する際には視線方向の情報を活用していないことを示し、視線方向の定位と相手の意図理解との間に生じるずれは、自閉症の中核的障害である注意共有の仕組みの不全に起因しているとする根拠とした。しかしこの研究に関し、現時点においても何故そのようなことが起こるのかについて確定的な論証は得られていない。そもそも視線と意図との関連性についてどの程度理解しているのか、また他の認知的な特徴が、阻害要因としてどのような影響を与えているのかということについて、もう一度検証する必要があると考えられる。

そこで本研究では「欲しい」といった相手の単純な意図である心的状態を視線方向に関連づけて考えないとされる自閉症児を対象に、その認知的特性と視線の持つ意味に関する理解の両面から検討することを目的とした。

II. 実験 1：視線方向の検知と意図の理解

実験 1 は「どれが欲しいか」という相手の単純な意図を推測する質問に対して、相手の視線の方向を手がかりにして回答するかどうかを調べるためのものであった。自閉症児が相手の意図を推測する際に、視線方向を検知する能力に関しては問題がないにも関わらず手がかりとしない傾向があると述べられている点について、その傾向が自閉症児全般に見受けられるものなのか、あるいは特定の子どもに限ったものなのかについて検討することを目的とした。

対象児は新潟県内の養護学校中学部・高等部に在籍していた自閉症児 7 名およびその周辺児 16 名の計 23 名 (男子 18 名, 女子 5 名) であった。基本課題では、相手の欲しいものはどれかという質問に対して、登場人物の視線の方向を手がかり

にして回答するかどうかを調べるための課題が行われた。4 つの対象物の中央に、その中のどれか一つの対象物を見ている登場人物が提示され、登場人物はどの対象物を欲しがっているかという質問がされた(Fig. 1)。また視線方向検知課題では、登場人物の視線の方向を検知できるかを調べるための課題が行われた。色, 形, 大きさが全て同じである 4 つの無意味な図形が対象物として対角線上に配置され、登場人物がどれを見ているかという質問がされた。

その結果, 相手の視線方向を検知する能力に関してはほとんど問題がないと考えられるものの, 相手の欲求に関わる質問をされた場合には, 視線方向を手がかりとして活用しない傾向があることが認められた($\chi^2(2)=19.277, p<.01$) (Table 1)。また対象児のうち 6 名は, 相手の欲求に関わる質問をされた場合には, ほとんど視線方向を手がかりに回答していないことがわかった(Table 2)。以上のことから, 自閉症児が相手の意図を推測する際に, 視線方向を手がかりにしない傾向にあると述べられている点について, 全ての自閉症に該当するわけではなく一部の児童に限られていることが示唆された。



Fig. 1 4 つの対象物と対象物を見ている登場人物

Table 1 基本課題および視線方向検知課題の正答数

	N	試行数	正答数(正答率)	
基本課題	20	319	238 (0.75)	**
視線方向検知課題	20	92	88 (0.98)	

+p<0.1 *p<.05 **p<.01

Table 2 基本課題と視線方向検知課題における個別の試行数と正答数及び正答率

対象児	基本課題			視線方向検知課題		
	試行数	正答数	正答率	試行数	正答数	正答率
A	16	7	0.44	8	6	0.75
B	15	4	0.27	4	4	1.00
C	16	4	0.25	4	4	1.00
D	16	4	0.25	4	4	1.00
E	16	4	0.25	4	4	1.00
F	16	4	0.25	8	7	0.88

* 課題における選択肢は4つであるために, 偶然に一致する確率は 0.25 であった

III. 実験 2 : 刺激要因が意図理解に及ぼす影響

他者の意図を推測する際に, 視線方向を手がかりにしないと思われる児童を対象に, どのような要因によって視線の活用が妨害されたのか, あるいは視線の意味をどのように理解していたのかについて, 検討を行うことを目的とした。抽出された 6 名を対象に, 刺激要因を変化させた実験 II が実施された。この課題は, 基本課題に含まれていた刺激要因 (色要因・意味要因・形状要因) の 3 種類の要因を順番に排除することによって, 登場人物の視線方向にある対象物を回答する回数がどのように変化するかを調べるために行われた(Fig. 2・3)。

その結果, 対象児 6 名の各課題間における平均正答率に有意な差はなく, 色・意味・形状の刺激要因の変化は正答率に対して影響を与えなかった($F(3,15)=1.13, ns$)(Table 3)。このことから, 対象物の刺激要因によって阻害されたものではないことが認められた。また, 各課題においてどのような選択基準が採用されたかについて検討を行った結果, 何らかの基準に沿ってある程度一貫した選択が行われていた。課題の変化に際して視線方向の手がかりを使用せずに, 対象物の形状に対する勝手な意味づけや, 色の微妙な濃淡に注目するなど, 様々な工夫をしながら個々に新たな基準を決めて選択していることがわかった(Table 4)。

